

## 滋賀の人権教育がめざすもの

子どもの言動には必ず理由があります。言動の背景に思いをさせ、子どもを理解することで子どもの見方やアプローチの仕方が変わってきます。そうした営みの積み重ねは、滋賀の人権教育がめざす子どもたちの姿にもつながります。



### ①人権を尊重する人間を育てる

「自分のことをわかってくれる」「自分は大切にされている」と実感できることで、他者も大切にしたい気持ちが芽生えてきます。不合理なことを見抜く力、解決しようとする実践的態度の育成をめざします。

### ②本来持っている個人の能力を発揮し、自己実現を図る

子どもにとって、学校が安心できる居場所になることは、自尊感情の育成につながります。自尊感情は、自分が本来持っている力を発揮（エンパワメント）し、自己実現を図るための「心のガソリン」になります。

### ③人と人との豊かにつながり、共に生きる

年齢、出自、障害の有無、国籍・文化的背景、性的指向・性自認等に関わらず、一人ひとりがさまざまな個性や特長をもっており、それぞれを認め合うことが大切です。多様な価値観や生き方にふれることで、共に生きることを実感できるようにすることをめざします。

## 差別の現実から学ぶ～同和教育の実践から～

「今日も机にあの子がいない」― 不就学の子どもの何とかしたいという教員の思いから同和教育はスタートしました。その中で、困難な状況にある子どもを理解し、一人ひとりを大切にする教育実践が行われてきました。「家庭訪問（訪宅）で子どもの背景をとらえる」、「子どもに寄り添う」、「仲間とつなぐ」といったことは、同和教育の中で大切にされてきた事柄です。

## 自分の人権感覚を確かめる

子どもたちは教師の生き方を空気のように吸いながら生活している。  
「学校における最大の教育環境は、教師である。」

びわこ成蹊スポーツ大学客員教授 園田 雅春 先生

### 使ってみよう!

滋賀県ホームページに当課作成のリーフレットや人権感覚向上シートを掲載しています。自身の学びや教職員研修等に、活用してください。



日々の実践を常に振り返りながら、人権感覚を磨き続けましょう。

人権教育 滋賀県教育委員会 [検索](#)

# 子どもの見方・関わり方を考える

## ～「子どものこと」を語れる職場に～

子どもを取り巻く課題が複雑化・重層化している中で、学校・園にはよりきめ細かな対応が求められています。これまでの人権・同和教育で培ってきた教師力（子ども観や仲間づくりの実践等）を若い世代に継承しつつ、組織的に取り組むことが重要です。

私たちの子どもを見る目や関わり方が、全ての子どもが夢と希望をもって学べる学校・園づくりにつながることを願って、このリーフレットを作成しました。

## こんなことに悩んでいませんか

私の言うことは聞かないのに別の先生の言うことは聞く。あの子とは相性が良くないのかなあ。



何でもよくできる子って問題はないから、特に気にならなくてもいいよね。

「私は差別なんかしてない」と言ったら、「気づいてないだけ」って返されたけど、本当かなあ。



服装が乱れていたり、持ち物がそろわなかったり、注意しても全然変わらないなあ。

あの子はクラスの子とけんかばかりするなあ。もっとやさしくなれないかなあ。



こうした悩みにどう対応していますか？先輩教員の多くも同じように悩みつつ、人権・同和教育の取組の手法や先輩のアドバイスなどに学びながら、実践を積んできました。子どもが教室で見せる姿だけではなく、生活背景ごと捉えることで指導が変わり、子どもの変容につながったということもその一例です。

こうした中で培われてきたものや経験を、風化させることなく共有・継承していくことが、これからの教育実践をより豊かにします。

# 自分の経験と重ねながら 子どもの見方や子どもへの関わり方 について考えてみましょう

**1** 4歳児のAさんは、すぐ相手とけんかします。その都度私はAさんに指導をしますが、Aさんはじっと横を向いたままで何もしゃべりません。

悩んだ末、保護者にこれまでのことを話しました。「家では言い訳は許しません。ガツンと怒っているの、園でも怒ってください。」と言われました。

その時私は「Aさんが横を向いて黙っているのは、言いたいことを我慢しているのではないか。」と考えました。

次の日、Aさんに困っていることはないかと尋ねましたが「ない。」と言います。私はAさんとの時間を確保して、まず私の困っていることをAさんに話しました。目が怖くてししゃもが食べられないこと等々。はじめはつまらなさそうにしていたAさんですが、次第に聴き入るようになり、そのうち「困っていることあった。」と言いました。

「この間、友だちと3人で遊んだとき、2人は嘘をついて必ず2人チームになって、私は1人チームばかりやった…。」

「この間のけんかのこと？それは嫌やったね。でも何故あのとき先生にそのことを言わなかったの？」

「先生が怒っているから…。怒っている人に何か言っても、また怒られるし…。」

「そうか…。ごめんね。ちゃんと話を聴くから次に何かあったときは教えてね。」と言うと、Aさんはまっすぐ私の顔を見て、「うん。」とうなずきました。

人とうまく関われない子どもには、じっくり話を聴くことが大切です。自尊心は自分の思いを受け入れてもらえるという安心感により育まれます。自尊心を育む第一歩は、教員の眼差し・一言・表情ではないでしょうか。

**2** 特別支援学校小学部1年生のAさんは「いいよ。」「だめだよ。」等の言葉がわかるようになってきました。興味のあるものを見つけると走りだすので、他の子どもとぶつかることがないように見守っています。

Aさんが廊下を走りだすと、私はいつもAさんの正面に立ち両手を広げ「危ないから走ってははいけませんよ。」と注意をしていました。けれども最近は私が注意をすると、よけいに気持ちが高ぶってしまい走るのをやめないで、「はいけません！」と大きな声を出し力強くで止めるようにしていました。

小学部集会のときのことで、この日はB先生がAさんの担当でした。Aさんが走りだしました。すると、先生が注意する大きな声も聞こえないのに、Aさんは走るのをやめてB先生と一緒に席に戻りました。私はそれを見てとても驚きました。

その日の放課後、Aさんがどうして走るのをやめたのかB先生に尋ねました。「走っていくAさんの横に並んで手を握って『何かな？』と声をかけただけよ。」と話してくれました。Aさんが興味を持ったものが何か一緒に見にいこうとAさんの思いを受け止めることを大事にしたこと、Aさんの真正面よりも横に立つ方がAさんの気持ちが落ち着くことも教えてもらいました。

熱心に関わっているつもりなのに、思いが伝わらないと感じることがあります。悩みがあるときは担任やグループの教員同士で話をすることで、支援のヒントが見つかるかもしれません。



**3** 初任者として着任した中学校でのことです。1年生の担任でしたが、とても落ち着かない学年で、中でもいくら注意しても言うことを聞かない2人組がいました。

休み時間になると廊下でプロレスごっこが始まり、その延長でけんかになったり、ぶつかってケガをさせたりということが連日のように起こっていました。授業始まるのチャイムが鳴っても遊びは終わらず、毎時間、教室に入れるのに一苦勞でした。そんな時に、プロレスごっこをやめさせる一言として、「また男同士で抱き合って。」というようなことをよく言っていたと覚えています。「わー、男同士で抱き合っとるー。」と周りの生徒が騒ぎます。すると、当人たちは自らヘッドロックをやめていくというわけです。

困難な状況にある子どもに寄り添い、話を聞いて一緒に考えていきたいと思って教員になりました。しかし、当時の私はセクシュアリティで悩む生徒がいることなど想像もせず、いないものとして排除し、毎日毎日傷つけていました。自分ではそんなつもりはなくても、知らず知らずのうちに相手を傷つけてしまう、無意識の差別です。

さまざまな生き立ち、生活背景、特性のある子どもたちに関わっています。知らず知らずのうちに子どもを傷つけていることがあるかもしれません。教員として、学び続けることを大切にしていきたいものです。



**4** 新しいクラスの担任になって2か月。4月は子どもたちに落ち着きがなかったり、もめごとが起こったりしていましたが、少し落ち着いて、担任としてやっと全体が見えるようになってきました。

ある日の休み時間、ふとAさんの靴を見ると、かかとを踏んで歩いています。色も黒くなっており、洗われていないようでした。

「Aさん、靴のかかと踏んだらあかんで。」「いいねん、これで。」「でも、行儀悪いで。ちゃんと履きなさい。」「……………」

Aさんは黙ってその場を去りました。

そのまま何日か過ぎてしまい、ふとしたときにAさんの靴に目がいきました。またかかとを踏んでいます。

「Aさん、靴なあ…。」「これでいいって言うたやろ。」「なんでちゃんと履かないの。」「うるさいな！」

そう言ったとたん、Aさんはその場から走り去ってしまい、放課後も避けるように帰ってしまいました。

気になったので、放課後Aさんの家に行きました。Aさんは妹と仲良く遊んでいました。

家の人に事情を話すと、「妹に新しい靴を買ってあげてって言っていました。生活が苦しいことを知っているから、自分の靴が小さくなっていても、きっと言いにくかったんですね…」と話されました。Aさんのやさしさと背景まで考えなかった視野の狭さに自分が恥ずかしくなった出来事でした。

決まりが守れていない、行儀が悪い等という表面的なことだけで子どもをとらえていませんか。家庭を訪問して話をすることで、学校ではわからないことが見えてくることもあります。

**5** 高校3年生の担任をした時のことです。クラスのAさんはいわゆる優等生タイプで、私はいつも「頼りになるわ。」「頑張ってるね。」といった声かけをしていました。

ある日の放課後、教室でひとり、勉強するAさんを見かけました。「勉強中？えらいなあ。先生いつも感心してるねん。クラスのみんなにもAさんを見習ってほしいわ。今度のテストも期待してるしな。」と声をかけました。

Aさんは私を見て少し微笑んだ後、また勉強に取り掛かりましたが、急に苦しそうな顔つきになって、ペンを握りしめてうつむき涙を流しました。そして絞り出すような声で一方向的に話しました。

「もし今勉強をやめてしまったり、いい大学に行けなかったり、いい子じゃなくなったら、私はどうなるんだろう。お母さんもきっと私を見る目が変わる…。今までこんな生き方しかしてこなかったから、どうしたらいいかわからなくて苦しい。そもそも私って何なんだろう…。私が生きている意味なんてあるのかな…。」

私は自分の中のあらゆる言葉を引き出して彼女に何か言わなければと思ったのですが、何も返すことができないまま沈黙の時間だけが過ぎていきました。

課題がないように見える子どもが精一杯「いい子」を演じていることもあります。子どもを自分の尺度で決めつけたり、「タイプ分け」したりしてはいないでしょうか。